

# キリストの光のキリスト

年間第6主日 2月11日 (世界病者の日)

(ルカ6・17、20-26)

「貧しい人々は、幸いである」…。マタイ福音書とは違って、ルカ福音書では「山上の説教」ではない。イエスは平らな所で話す。目を上げ弟子たちを見て言う。「貧しい人々は、幸いである。神の国はあなたがたのものである」と。

三年前の聖金曜日、受難の朗読の間、祭壇の中央に立って「イエス役」をしながら気づかされたことがある。イエスはこれ以上低くないところまでご自身を低くされた。朗読が終わって祭壇を降り、祭服を着たまま床に這いつくばった。典礼に参加していた信者はわたしを見下ろした。わたしは彼らを見上げて話した。

「イエスは上からではなく、

## イエスは目を上げて

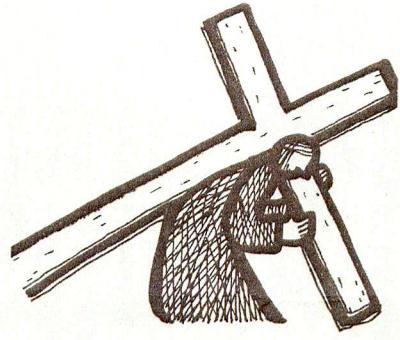
ここまで下がって福音を説かれた。これ以上低いところがないところまで下がって話された。もつとも低くされた人と同じ視線で話された。神がわたしと共にいて、共に寄り添い、同じ目線で語られる。だから、わたしたちは救われる」

イエスは「下から」「目を上げて」語られる。上からではなく、下から、見下すのではなく、見上げて語られる。神の視線。わたしたちの想像とはまったく逆の視線。これこそ福音。

イエスのことを思いだす。「わたしは仕えられるためではなく、仕えるために来た」

「わたしはあなたがたを友と呼ぶ」「わたしがあなたたちを愛したように互いに愛し合い

なさい」。イエスはご自身を低くされた。だから父である神はイエスを天の高みに引き上げてくださった。イエスは天の高みから語られるのではない。福音は、低いところから語



られた。イエスは目を上げて語られる。今日も…。

いつも高い説教台から話している。妙な感覚が身に染み付いてしまう。いつも上から話すようになってしま

う。下に降りることが難しくなる。同じ視線で見たり、聞いたり、話したりすることができなくなってしまう。イエスの感覚からだんだん離れてしまう。下から語られた福音を上から語ってしまう。そうすると福音が福音でなくなり、「お説教」になってしまふ。そうなる、人を救う言葉にはならない。

教会は「下から見る」ことを忘れてしまったかのようである。上から語り、人々に教えてばかりいるように見える。「共に」といいながら、降りていこうとは思わない。自分が上にあると思ひ込み、人々が上がってくることを待っている。「共に」とか「開く」と

か「降りていく」という表現さえ傲慢に見えてくる。なぜなら、教会は本来「下にある」存在。それ以上でも、それ以下でもない。

「イエスは目を上げ弟子たちを見て」語られた。イエスと同じ視線に立つことは現実をしつかりと見据え、現実の中に身を置くことだと思ふ。難しいことだが、そこでしか救いは実現しない。

(山元眞||福岡教区司祭/カット||高崎紀子)

今週の福音

- 12日・月マルコ 8:11-13
- 13日・火マルコ 8:14-21
- 14日・水マルコ 8:22-26
- 15日・木マルコ 8:27-33
- 16日・金マルコ 8:34-9:1
- 17日・土マルコ 9:2-13